

公益財団法人やまがた教育振興財団
「教員養成に関する調査研究事業」
報 告 書

児童・生徒の発達段階を踏まえた
国語科での振り返り活動に関する調査研究

令和5年3月

山形大学 学術研究院(地域教育文化学部主担当)
講師 菊田 尚人

1. 研究の目的

本研究の目的は、国語科での振り返り活動の取り組みを校種間で比較することで、学習者の発達段階を踏まえた効果的な振り返り活動を考える上で初任者が留意すべき観点を明らかにすることである。それによって、学習者の深い学びを促進する振り返り活動を設計できる教員の力量形成に活用したり、教員養成のカリキュラム改善に活用したりできる基礎資料を提供することを目指す。

本研究の背景には、小中高等学校の学習指導要領で共通して示されている学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動が、授業実践において十分に取組みられていないという問題状況がある。

例えば、全国学力・学習状況調査のH29年度の質問紙調査では、授業の中で振り返り活動を十分に行っているかどうかに対する教師と学習者との認識にはズレが生じていることや、授業の中で自らの学びを振り返る活動に十分に取組んでいると認識できていない学習者がいることなどが明らかになっている。授業で振り返り活動を行っていたかどうかという質問に「あてはまる」もしくは「どちらかといえば、あてはまる」といった肯定的な回答をした学習者の割合は、肯定的に回答した教師の割合と比べて低くなっている。山形県の結果も全国的な傾向と同様であり、振り返り活動に対する学習者の認識が教師に比べて低くなっている。H29年度の小学校調査では教師の91.9%が学習活動を振り返る機会を設けていると回答しているのに対して、そのように答えている児童の割合は76.2%であった。また、中学校調査では、教師の回答率が90.7%であるのに対して、生徒の回答率は66.7%であった。

また、授業時の振り返り活動に対する学習者の学びの認識が低いという状況は、全国学力・学習状況調査だけでなく、山形県独自の学力等調査でも明らかになっている。H31年度の学習状況調査では、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思うかという質問に対して、「あてはまる」もしくは「どちらかといえばあてはまる」と回答した学習者の割合は、小学校63.7%、中学校53.6%であった。

こうした現状から、学習者の学びの実感を伴った効果的な振り返り活動を構想できる教師の力量形成が必要であることが分かる。特に、山形県教育委員会の教員「指標」にある「学習指導要領を理解し、授業を行うことができる」という項目を達成する上で、効果的な振り返り活動を取り入れた授業を構想できる初任者の育成は急務といえる。

小学校から高等学校までの国語科の授業で取組みられている振り返り活動の実態から、教師が振り返り活動を取り入れる際に留意すべき観点を導き出すことができれば、教員養成における有益な資料を提供できるだろう。

そのための具体的な研究課題は、以下の二つである。

- ・ 国語教科書にある振り返り活動の手引きを校種間で比較すると、国語科での振り返り活動にはどのような特徴があるか。【研究課題1】
- ・ 国語科での振り返り活動の取り組みを校種間で比較すると、国語科での振り返り活動にはどのような特徴があるか。【研究課題2】

2. 研究課題1について

2-1 はじめに

小中高等学校の国語教科書にある振り返り活動の手引きを比較することで、国語科での振り返り活動にはどのような特徴があるのかを明らかにする。振り返り活動の手引きとは、教科書の各教材に付いている学習の手引きの中で、学習者に自らの学びを想起させる活動を促す手引きのことである。教科書によって表現は異なるものの、「学びを振り返ろう」や「振り返り」といった見出しがついている手引きを、本報告書ではまとめて「振り返り活動の手引き」とする。振り返り活動の手引きの網羅的な調査によって明らかとなった校種間での手引きの特徴をもとに、教師が振り返り活動を取り入れる際に留意すべき観点について考察する。

2-2 振り返り活動の類型と振り返り活動で教師が留意すべき観点の考察

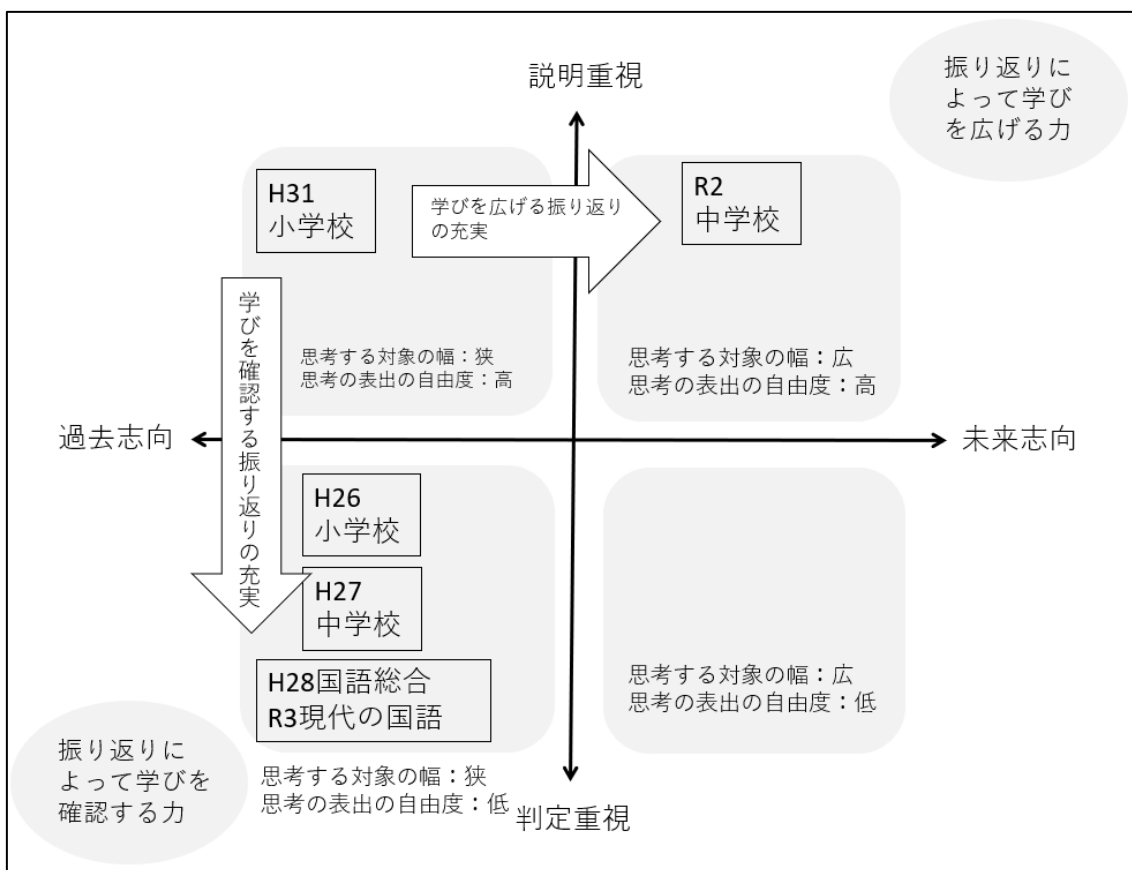


図 振り返り活動の高度化の二つの方向性

R3年版の小学校教科書を起点として考えてみると、学習者の豊かな学びの実現に向けて振り返り活動を高めていくための視点として、「学びを広げる振り返りの充実」と「学びを確認する振り返りの充実」という二つの視点を見いだすことができる(図)。中学校教科書が示す方向性は、小学校教科書では教科書が過去のことを想起することに限定していた思考の対象について、何について思考するかも学習者に委ねることで学習者が学びを広げられ

るようになることを重視している。一方で、高等学校教科書が示す方向性は、小学校教科書では学習者に委ねられていた振り返った事実の説明の仕方について、基準に沿って学習活動を評価することに限定し焦点化することで、教科書が示す条件としての評価基準に達したか達していないかを学習者が深く吟味できるようになることを重視している。

こうした「学びを広げる振り返り」と「学びを確認する振り返り」という二つの性格のどちらの振り返りを充実させるかを決めておくことは、振り返り活動の内容や方法を考える上での重要である。そのため、振り返り活動を高度化していく際には、学習者が振り返りを通して学びを広げられるようになることを目標とするのか、学びを適切に確認できるようになることを目標とするのかを教師が決めているかを確認する必要があるだろう。

3. 研究課題2について

3-1 はじめに

小中高等学校の教員を対象とした国語科での振り返り活動の取り組みに関するアンケート調査の結果を比較することで、国語科での振り返り活動にはどのような特徴があるのかを明らかにする。現場の教員から出された国語科での振り返り活動に対する様々な取り組みや実情をもとに、教師が振り返り活動を国語科の授業で取り入れる際に留意すべき観点について考察する。

3-2 アンケート調査の概要

3-2-1 対象者と質問紙の配布方法、実施期間

調査対象者は、山形市内の小学校教員、中学校と高等学校の国語科担当教員である。山形市内の小学校と中学校、高等学校に依頼文書と回答用フォームのURLをメールで送付した。小学校と中学校は、2023年2月13日(月)から2023年3月3日(金)の間に回答を求めた。高等学校は、2023年1月20日(金)から2023年2月28日(火)の間に回答を求めた。

3-2-2 調査内容

国語科の振り返り活動に関して、以下の5つの質問に回答を求めた。

- ① ご所属の校種を教えてください。
- ② 国語科の授業では、振り返り活動をどれくらいの頻度で行っていますか。
(選択肢:「毎回行っている」「毎回ではないが、一单元の中で複数回行っている」「一单元の中で一回は行っている」「一つの学期で、一回は行っている」「一年間で一回は行っている」「行っていない」)
- ③ 国語科での振り返り活動として、どのような学習活動を行っていますか。
- ④ 国語科で振り返り活動を行う際に、難しさや困難さを感じることはありますか。
(選択肢:「はい」「どちらかといえば、はい」「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」)
- ⑤ (④で「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した方のみ)どのような点に難しさや困難さを感じますか。

3-3 回答結果と振り返り活動で教師が留意すべき観点の考察

アンケートの回答を踏まえると、振り返り活動が学習者にとって豊かな学習活動となるためには、振り返り活動だけでなく単元自体が学習者にとって真正な学習となっているかという点に留意する必要があることが分かる。振り返り活動の特徴として、振り返ったことの質について現場の教師に問題意識があることがアンケートの回答から明らかとなった。振り返り活動の質というのは、振り返り活動を通して学習者の思考が深まっていないことや振り返りが発展的に生かせるものになっていないことであった。こうした課題を解決するためには、振り返り活動だけを改善するのではなく単元レベルでの工夫が必要である。そうしたことから、単元そのものが真正な学習活動になっているかを常に確認することが教師には求められているといえる。

特に、国語科における振り返り活動の真正さを考えるためには、振り返り活動のどの側面が学習者にとって真正なものになっているかを教師が意識する必要がある。国語科における振り返り活動の真正さとして、振り返る活動自体の真正さと目標の真正さという二つが考えられる。

一つ目の活動自体の真正さに対して、振り返り活動のバリエーションを教師がもっていることが重要である。アンケートの回答でも、学習者に自分にとっての学びを記述させたり、振り返りを交流するなどの共同的な活動の中で振り返らせたりといった様々な方法が出された。こうした方法を、目の前の学習者に合わせる形で選択することが必要である。なお、方法を選択する際には、学習者の振り返りを言語化する能力について意識する必要もある。

二つ目の目標の真正さに対して、国語科での目標設定の重要性と難しさを教師が自覚していることが重要である。アンケートの回答でも、振り返る観点として学習目標や学習活動に対する評価の観点というものが振り返るための観点として活用されていた。こうした観点について、目の前の学習者の実態に合わせて吟味していく姿勢が教師には必要である。

4. 今後の取組及び期待される効果

本研究で明らかとなった初任者が留意すべき観点として、以下の二点を指摘した。

- ・ 振り返り活動を高度化していく際に、学習者が振り返りを通して学びを広げられるようになることを目標とするのか、学びを適切に確認できるようになることを目標とするのかを教師が予め決めておくことが必要であること 【研究課題1】
- ・ 単元自体が学習者にとって真正な学習になることを教師が意識することが必要であること 【研究課題2】

こうした知見を教員養成段階において活用することで、国語科における振り返り活動を構想できる教員の育成が可能になるであろう。また、本研究で明らかとなった国語科の振り返り活動に関する基礎資料は、教員研修等の場で活用することで、国語科の振り返り活動についての知見や実践事例がより一層充実することにもつながるだろう。

謝辞

本研究の実施に当たってご協力いただいた関係者の皆様に、記して感謝申し上げます。